

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所  
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203  
Tel. (045) 671-1109  
振替 00200 - 1 - 47369  
E-Mail : naka@church.jp HP : http://church.jp/naka/  
発行者 なか伝道所/編集委員会 (題字 松橋 順)

## 宣教方針

- ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
- ② 地域の問題に関わる。
- ③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会 主日礼拝 日曜日 午前10時30分より

## なか伝道所の現状について



三密を避けるため、隣の人と距離を取って。

三年間、なか伝道所(以下、なか伝)の牧師として働いてくださった堀江牧師が三月で辞任され、四月から、なか伝は無牧となりました。

いま私たちはこの間の反省も踏まえて、これからのなか伝の歩みについて共に考えていこうとしています。実際は目の前にあることに追われて何もできていないのが実情ですが、それも運営委員会(役員会)が中心になって、少しずつ前にすすもうとしています。今回はその経緯を報告させていただきます。

### ■なか伝の目指す礼拝(案)

まず堀江牧師の辞任を前にした二月に、有志が「礼拝について」という内容で話し合いの時を持ちました。その時に出された案は、

- ① 一方的に牧師などの話を聞くというスタイルにはしないで、みんなで作っていく。
- ② 午後のプログラムも礼拝の時に一緒にやる(午後のプログラムはなし)。
- ③ 礼拝の式次第は、司会者にゆだねる。
- ④ 礼拝の中で「私たちにとっての教会って何? 礼拝って何?」ということも語り合いたい。
- ⑤ 朝の準備担当と、鍵当番を決める。
- ⑥ 中心メンバーに負担がかかりすぎないようにする。

そして具体例として、一週目・私のイエスについて(ひとりが発題をした後、みんなで話す)、二週目・聖書について(説教集や聖書についての本を読んでみんなで話す)、三週目・共に本を読む(「福音と世界」などを読んで、みんなで感じたことなどを話す)、四週目・課題から学ぶ(なか伝の仲間、また外から講師を招き、課題について学習する)、五週目・イベントなど(修養会・野外礼拝など)の案が出されました。

三月下旬に上記の「礼拝について」の案を基にして、みんなで話し合い、意見交換をしました。以下はその「記録」から抜粋したものです。

### ■意見交換の「記録」から

・休んだ人の消息を毎回聞く。安否情報を確認できると、その人がどんなことをやっ

ているのかを知るきっかけになる。この人数・距離感だから、そういう意味を持った集まりであることも大切にしたい。

・今日の礼拝で使信を担当したが、自分でメッセージを作る作業をしながら、自分の考えていることを確認出来る時間になった。言葉にして人に伝えていくという作業の恩恵、副産物だと思う。みんなで作り上げていくのであれば、その人が何を考えているのか、どういう人であることを知ることが出来る。繋がりを作っていく作業ができるのでは。

・「イエスを考えること」「教会って何か」「この場合は何か」を考えていきたい。一緒に考えていく場もほしい。

・自分にとっての教会の良さは「つながり」。ずっと来ていると「今日は行かない」と思っても急に来てみたくなり、来ないと忘れ物をしたみたいに感じる。

・私は自分が病気だから、教会は行って治してもらおう病院みたいなところだと人には説明する。教会に来ると、一週間分のエネルギーをセットしてもらえ。一緒に讃美歌をうたってお祈りをするのが自分にとっては大切。

・話し合いのルールを決めた方がいいと思う。思いついた時に自分の感情に任せて言ってしまうから、お互いを否定しないように話し合おう。私たちが牧師を辞めさせてしまった。それをきちんと念頭に置く必要がある。

・学校でやった礼拝の形が参考になると思う。毎回交代で発題を担当し、各自が聖書の言葉に基づいて自由に自分の思いを語る。その上で互いに話し合う。

・堀江牧師が辞任の決心をしなければならなかったことを何とか受け止めようとしている。今までのことを白紙にして新しいことをすることは考えられないので、この三年間を総括して、教会が何なのかを考える必要があると思う。まず自分たちの足元を固めたい。

・問題の一つは牧師に勝手な期待を負わせて頼りすぎ、みな「お客さん」になってしまったこと。今回は、この問題を踏まえて参加者が一緒に作っていく教会を考えたい。

・自分たちが担ってやっていた中で、これまで牧師にかけていた負担や内在していた問題についてもわかってくるのではないかな。

・自分自身のために教会に來ていると思う。礼拝は、聖書と向き合って神様を考えて自分と向き合う時間なので、どのような形でもいいので聖書は読みたい。

・私は讚美歌をうたうこと、一緒にお祈りをするのが嬉しくて来ている。

・礼拝の中で、ここ三年間の振り返りと総括をしてはどうか。午後の時間を使うのも一つの方法。

・いろんなことがテーマになる。日本基督教団は何なのか、歴史上何があったのか。キリスト教の歴史上の罪責について話し合うことは大切だと思う。

・堀江牧師を通じてはじめて教会に來た方で、有意義な出会いがあったり繋がった人もいる。「なか伝の取り繕わない教会のスタイルが良かった」という人もあった。なか伝は闘う教会だったはず。礼拝に出た人が、もう一度自分の場で闘おうという気持ち

で自分の場に戻っていくような場であってほしい。

・意見交換の際の批判は相手を傷つけるし、聞いている方もうんざりする。相手の気持ちになる気つきが必要ではないか。

・もともとオーソドックスなところで育ってきた。今までずっと慣れ親しんできた習慣や慣習を切り替えるのが難しい人もいるのを念頭においてほしい。

・ずっとやってきた手話とか、今まで作ってきた形を維持するのも大切ではないか。

・当初、なか伝にはそういう形はなかった。形つて、あると囚われてしまう。四角張ってないところが、なか伝の本質ではないか。

・昔ながらのオーソドックスなやり方がいい人、新しいやり方がしたい人。お互いに相手が考えていることを可視化する必要がある。可視化ができていない、言葉が足りないと感じる。

・別の教会では、隣の人と手をつなぐのを、みんなが嫌がった。ここでは「平和のあいさつ」をうたいながら手をつなぐことが、普通にできているのがすごい。(注…ソーシャルディスタンス確保のために、現在手をつなぐことはしていない)。

・手をつなぎたくない人もいることを知っていることが重要。「差しさわらない人は手をつなぎましょう」と呼びかけているが、それでもプレッシャーがあるのは確か。それをどうするかも含めて、話し合いたい。

■最後に  
この三月の話し合いは、はからずも、な

か伝に集まる人の考えの多様性を再確認することにしました。いろんな思いを持っているメンバーが、どうしたら教会の仲間として一緒にやっていけるのか、これからの課題のひとつです。

また、なか伝は、その前身の中村橋伝道所以来、長く一人の牧師が牧会を担い、また副牧師も同伝道所出身者が多かったのだとした。互いに気心がわかつていてという安心感がありました。その弊害として「何とかなるさ」というような安易な空気が教会の中に蓄積していたことは否めません。何事についても曖昧のままできてしまったこと。これは堀江牧師に何度も指摘されてきたことでしたが、今回無牧になったことで、いかに自分たちが牧師に依存してきたかを再自覚させられています。

コロナウイルス感染予防のために、なか伝では三月二十九日の礼拝を最後に礼拝の休止状態が続きましたが、六月十四日から礼拝を再開。現在は第一週・第三週・第五週の隔週礼拝を、二月に出された「礼拝について」の案を基本として行っています。

今後、自分たちの伝道所をどうしていくのか？は大きな課題ですが、一人ひとりの責任で牧会を維持していくことの難しさを感じつつ、でも堀江牧師から学ばせていただいたことを大切にして、前に向かって進んでいきたいと思っています。

(渡辺幸子)

## 風景

七月十九日オンライン礼拝が始まった。コロナウイルス禍でなか伝を欠席していたので、久しぶりに皆様にお目にかかれて嬉しかった。お話ししてくださる汀さんが以前と変わってエアコン側に座り、周りには間隔を取ってマスクをした懐かしい顔が見られた。手を振って挨拶をする。まるで自分もそのなかにいるような感覚である。私の顔はパソコンの隅にある。電車に乗って行かなくても礼拝に参加できた。便利な世の中になったものだ。

汀さんのお話が心に響いた。牧師中心の教会ではなく参加者一人一人が動き働くことが大切だ。神と出会った教会を一步出た後にどう動くのかを試されていると話された。

年寄りの私は何もできない。近所のサークルで子供たちに手話を教えたり、読み終わった本を箱に詰めてアムネスティに送るくらいだ。すっかり足も弱ってきたが、せめて時々は散歩に出かける。

最近「むくげ」がきれいに咲いているのを見かける。韓国の国花だ。赤やピンクや白もあって、あちこちで咲き誇っている。韓国に帰ったなか伝の友達を思い出した。ご無沙汰しているがお元気だろうか。なか伝の入口の看板を彫ってくれた人だ。

今世界中に猛威を振るい、恐ろしい感染力のコロナウイルスに負けないようにお互いに三密を避け、マスクをして元気で過ごしたいと思う。

(宮 タス)

# コロナウイルス状況下での、寿の活動

## 寿地区の医療福祉介護の

### 連携について 沓澤則子

新型コロナウイルスの報道に触れたのは一月下旬だったように記憶しています。海外での報道を見ても、どこか別の国で起こっている出来事という認識でしたが、横浜港クルーズ船内での感染を聞き、ただ事ではないと感じました。そこから感染が拡大し、振り返ればもう六か月も過ぎており、現在も危機感が続いています。

私は寿地区で医療関係の仕事をしていました。この約六か月間の医療福祉介護での取り組みと寿地区のようすをお伝えします。

現在、寿地区は高齢化率が高く（六十五歳以上が五十七パーセント）、基礎疾患・精神科疾患で療養している人が多くいます。住まいである簡易宿泊所は、バリアフリーの広い介護部屋が増えましたが、基本的には三畳ほどの個室です。トイレ洗面所・炊事場・コインシャワーは共有のため感染リスクは高く、もし感染が発生し拡がる事態となれば、かなり困難な状況が予測されます。

寿地区に住む人は、交流センターや図書館

等あらゆる施設の閉館により、行き場所がなくなりしました。感染を気にして部屋にこもる人、外で将棋を指す人、それを見る人々、三々五々歓談して過ごす人と、様々でした。連日のテレビ報道による影響もあり、自身が感染しているのではないかと不安から入院したケースもありました。

寿地区で活動しているデイサービス・デイケアは約三十か所、訪問看護・介護は約四十五事業所、作業所が約十五か所あります。医療介護現場は濃厚接触によって成り立っており、外から来る私たちがウイルスを持ち込まないように、運ばないようにと緊張感がありました。実際に発症者が出た場合にどう対

応すればよいか、マスクや消毒液が手に入らない等の不安が拡がっていました。そのため三月中旬、寿地区内にある診療所の医師の呼びかけで、医療介護機関・簡易宿泊所・施設等間での横の連携体制ができました。定期的なウェブ会議が開かれ情報交換をしています。

四月七日に政府により緊急事態宣言が出され、その後、区役所職員の感染が、続いて寿地区の基幹医療機関の院内での感染が二件発表されるなど緊張が増していく中、私たちは感染予防策を徹底しながら、淡淡とした心持で其々の仕事をしていました。当初からマスクを作っていた作業所ではガウン（防護服）が製作され、必要とする所に提供されています。七月中旬の時点で、寿地区内で新型コロナウイルス感染者の報告はありません。

徐々に寿地区内やその周辺の施設等が再開され日常が戻り、緩やかな時間が流れ始めました。住人の方に聞くと、人が多い所でのマ

スク着用や手洗いの意識に変化があります。住む人も関わる人も、感染しない・させない実践を継続し、この騒動が終わった時、あの時は大変だったねと笑顔で話せるようになりたいと思います。そう願って活動を続けます。

## 寿の炊き出しに参加して

### 牧野美登里

新型コロナウイルスのため、三月から外出自粛、一斉休校などで寿の炊き出しボランティアの若者や団体が参加できなくなっていました。しかしボランティアのみなさんは心にとめてくださり、金曜日の炊き出しのときには、おにぎりやカップラーメン・果物・マスクなどが届けられ、配食の時に一緒に配られた。お手紙も添えられていて次の週「うれしかった」という方たちもいました。それを聞いて、私たちもうれしかった。

ボランティアの方たちはマスク・三角巾（または帽子）・ゴム手袋等を付け、持ち場につきます。しかし配食の列に並ばれていない方でしようか、役所に通報する人もおり、何度か役所の人の見回りもありました。いろいろなところでされている炊き出しも、この期間炊き出しを中止しているところもありましたが、一つ一つクリアーし、続ける「寿の炊き出しの会」は、あっぱれです。

炊き出しの会は、仕事が無くなり、宿もなくなり路上に出ざるを得ない人が増えるのでと心配してました。このような気持ちがか

## えーとねえ

えと  
千支を覚えようとしているトモヤ君

トモヤ 「ネ・ウシ・トラ・ウ・タツ・ミ・クジラ」

私 「え？ クジラ？」

母 「ウマでしょ」

トモヤ 「ウマ・ヒツジ・サル・トリ・ワン」

母 「イヌでしょ？」

トモヤ 「もうイイ！」

トモヤ 三才四か月

の期間でも炊き出しを続けることの根底ではあったと思いますが、心配が当たり、初めての方たちも列に並ばれていました。

ネットカフェが休業になり、神奈川県は横浜市港北区にある武道館を四月十一日から五月六日まで宿泊所として提供しました。寿の炊き出しの会は、越冬のグループなどと一緒に武道館を四回訪問し、マスクやお菓子・消毒薬などを届け、入り口で相談の机も出しました。この場所は食事の提供はありません。

少しでもお金を持っている人はコンビニで買うことができますが相談場所では、まだお金は少しあるとは言われていましたが、収入が

無くなり不安だとの声がありました。館内は間隔をあげ薄い布で仕切られています。一緒に訪問された診療所の先生は「あんなべらべらな布では感染防止にはならない」と心配されました。夜は県から提供された二枚の毛布ではとても寒く三枚にしてもらったそうです。職員の部屋の暖房が羨ましかったと。女性には会議室を利用して、暖房はあったそうです。

役所は館内で時間を区切り相談窓口を開いてました。県営住宅（古く不便なところにある）、仕事にも行きづらいうので空いているとのことを勧めたり、寿の中の「はまかせ」入

てはとても嬉しい、大切な時間になりました。感染対策につとめながらの礼拝となり、一部オンライン参加も実現できました。無牧の教会として再スタートした四月以降、新型コロナウイルスの流行もあり、さらにたくさんの課題に直面しています。

## まど

七月五日、「私のイエスについて」をテーマにした礼拝を持ちました。三月から皆で話し合ってきた「これからの礼拝のもち方」を少しずつでも実行していきたいと思いつつ、参加者がそれぞれ自分にとって大切な「イエス」のことや、聖書で好きなところを話しました。マタイ十一章二十八節、マルコ十章十七節、創世記九章十三節、人との「出会い」が出発点になったこと、詩編に出てくる羊飼いの、山上の垂訓、「思い悩むな」、ガラテヤ書一章二十節、イザヤ書五十三章、「十字架のイエス」、ペテロの否認、ロマ書五章五節「希望」。教会との出会いを語ってくれた人もいました。一人ひとりの方から、大切にしている言葉や思いを教えてください、自分にとつ

てはとも嬉しい、大切な時間になりました。感染対策につとめながらの礼拝となり、一部オンライン参加も実現できました。無牧の教会として再スタートした四月以降、新型コロナウイルスの流行もあり、さらにたくさんの課題に直面しています。「キーワードは『無理しない』こと」と話し合ったのと裏腹に、運営にかかわるメンバーが時間と精神力をつぎ込んでいる日々だと感じます。思うように参加できないときも多く心苦しいですが、これから「どんな礼拝/教会でありたいのか」を話し合い実行していけるよう、関わる人たちにとって大切な、安全な場としてあり続け、また寿にある教会となることができるよう、一緒に考えていきたいと思っています。

(小笠原純恵)

所を勧めたりとのことでした。利用にふみきつた方もいますが、もう少し頑張るといいう方、友人を頼るといいう方もいました。

武道館出口には貧困ビジネスの職員がアパート紹介に立っていました。(後日の新聞記事で、そこを利用された方が収入から十万とられ、手元には三万しか残らないとの記事を見ました)。外国籍の方は、コロナの前は何十万も稼いでいたが、妻子に仕送りしたら自分はネットカフェを使わざるを得なかったと。旅行客の送り迎えも、翻訳の仕事も三月からばたつと無くなったとのこと。またある若者は、就職活動のため上京したが、面接もなく思いどおりにならないと。仕事の内定をもらった方も、解雇や雇い止めが多いということ。不安を抱えている人がいたとのこと。

しかし六月七日午前中には、不安を抱えながら退所されました。炊き出しの会はその後も、「日本にお住まいのすべての方へ」とチラシには書かれている定額給付金をもらう手続きが困難な人たちのため、横浜市と交渉を続けています。

## 編集後記

やっと『なかだより』をお届けできる事になり、ほっとしています。今年度から年三回の発行を予定していましたが、慣れない作業に四苦八苦。「自分たちで責任を持つ」の目標には、まだまだです。

(幸)

## ・・・礼拝あれこれ・・・

このコロナ禍の中、よその教会はどのような礼拝をおこなっているのかと、素朴な疑問の元リサーチしてみました(五教会)。結論から申し上げると、すべての教会が時間短縮のための工夫をしてみました。具体的には：共通していたのが、讃美歌のボリュームを抑えること。例えば・・・一節のみ、二節分を歌うなど・・・、その上小さな声か、あるいはこころの中で歌うというものでした。加えて、聖餐式と集会の休止も共通している事柄でした。説教は、ほとんどのところが、20分前後で終わらせているようです。

ユニークな例をいくつかお伝えします。ある牧師は、日曜日の朝七時から八時の間に、説教の完全原稿を配信しているそうです。また、ある教会では、信徒は礼拝を含めてすべての奉仕をしなくてよい、掃除も牧師が行うというものでした。さらに、ある教会では、礼拝をYouTubeで同時中継しており、これは主に教会に足を運ぶことのできない方のために、すでに実施していたものが、役立ったとのことでした。牧師がいても説教は短いのですね。

(工藤玲子)

▼いつも、なか伝を支えていただいで感謝いたします。

▼紙面の関係で、支援献金等の報告は別紙にてさせていただきます。

▼これからもご支援を、よろしくお願ひします。